

スラッフアの生産方程式の端緒を探る

— 予備的考察 —

A Preliminary Consideration for Exploring the Origin of Sraffa's “Equations of production”

松 本 有 一

In the Preface to his *Production of Commodities* Sraffa wrote “in 1928 Lord Keynes read a draft of the opening propositions of this paper”. The opening propositions will correspond to chapters 1 and 2 of *Production of Commodities*. Sraffa left many drafts and manuscripts, and we can read them as Sraffa Papers reserved at Wren Library, Trinity College, Cambridge now. G. de Vivo and G.Gilibert consulted the Sraffa Papers and tried to confirm the origin of Sraffa's equations. I have some questions on their arguments and examine them in this paper.

Yuichi Matsumoto

JEL : B12, B41

キーワード : スラッフア、生産方程式、価格と再生産

Key words : Sraffa, equations of production, prices and reproduction

- I はじめに
 - II 生産方程式に関する de Vivo と Gilibert の調査と彼らの見解
 - III 生産方程式の端緒— de Vivo と Gilibert の議論の検討
 - IV 今後の課題—むすびにかえて
- 補論

I はじめに

スラッフア (Piero Sraffa, 1898-1983) は『商品による商品の生産』(Sraffa (1960)) の序文で、「1928年にケインズ卿が本書の冒頭の諸命題の草稿を読んだときに、彼は、もし収穫一定が仮定されないとすれば、その趣旨について明確な注意が与えられるべきだと忠告してくれた」と記した。その「冒頭の諸命題の草稿 a draft of the opening propositions」はどのような内容だったのか、そしてそれはどのようにしてスラッフアにもたらされたのか。筆者はかつて拙稿 (松本 (1989)) において、当時利用可能であった手掛かり (スラッフア周辺の人びとの証言など) に基づいて探ってみたが核心にいたることは出来なかった。いまそれを探る手掛かりはスラッフア・ペーパーズの中にある。あるとすればそこにしかないだろう。

本稿は「冒頭の諸命題」の端緒ないし原型を探るための経過報告でしかないが、課題を果たすための問題点を示しながら、議論を進めて行きたい。そのために、まずスラッフア・ペーパーズに関して簡単にふれ、そのあと本稿の課題に関連する、スラッフア・ペーパーズを利用した2つの論文の検討を通していくつかの論点を明らかにしたい。

スラッフアが1983年に亡くなったとき、彼が収集した稀覯書を含む蔵書と書き残したノート類やその他の文書 (私的なものを含む) が英国ケインブリッジのトリニティ・コレッジ (Trinity College, Cambridge) に残された。蔵書は比較的早く整理され閲覧できるようになったが、ノート類の整理は時間がかかり、またその出版が計画されていて、出版の後でなければオリジナルノート類は公開されないということであった。しかし、どのような事情があったのかはわからないが、整理作業が済みカタログ (目録) が出来上がった段階の1994年に、スラッフアが書き残したノート類やその他の文書類が、スラッフア・ペーパーズ (Piero Sraffa Papers) として公開されることになった。他方、出版計画は、当初スラッフアの文書・著作の管理者 (literary executor) であるガレッニャーニ (Pierangelo Garegnani) の編集によって進められると伝えられていたが、その後ハインツ・クルツ (Heinz D. Kurz) が中心になり編集作業が進められおり、いずれ出版されることが伝えられている。

スラッフア・ペーパーズが公開されてからそれに基づく研究論文が出始めた¹⁾。筆者は遅ればせながら、2009年4月から5か月余スラッフア・ペーパーズの調査にあたる機会を得た。スラッフア・ペーパーズ全体の概要は Smith (1998)、Kurz (1998)、Kurz and Salvadori (2005)などを参照して頂きたい。

II 生産方程式に関する de Vivo と Gilibert の調査と彼らの見解

『商品による商品の生産』の「冒頭の諸命題の草稿 a draft of the opening propositions」はどのような内容だったのか、そしてそれはどのようにしてスラッフアにもたらされたのか。このテーマに関連してスラッフア・ペーパーズを利用した研究に de Vivo (2003) と Gilibert (2003) があるので、これらを参照しながら考えていくことにする。

De Vivo (2003) の主張点は次のように要約することができる。

『商品による商品の生産』へと進んでいくスラッフアの研究の出発点は「費用－価格方程式 cost-price equations」²⁾の形成であった。それはリカードの価値論からでもマルクスの「価値の生産価格への転化」からでもなく、マルクスの再生産表式から導き出されたものであった。それは『剰余価値学説史』でのマルクスの重農学派解釈の研究から「ほぼ確実に almost certainly」スラッフアにもたらされた。

スラッフアは種々の方法を試みたが、主に影響を与えたのはリカードとマル

1) 日本人研究者のスラッフア・ペーパーズに基づく研究報告はいまのところ千賀 (2002) だけであろう。スラッフアの未公開文書を論文等で引用する際には文書管理者であるガレッニャーニの許可を得なければならない。実際、これまで公開されている研究論文ではその旨 (ガレッニャーニの許可を得た) の記載がある。本稿は日本語での記述でもあり、スラッフアの未公開文書から引用する際には、既刊論文で引用された文書 (その意味では公開されている文書) を利用する形を取ることにする。スラッフア・ペーパーズのカタログ (目録) は Web 上で公開されている (Salvadori (2005) 参照)。

2) 筆者はスラッフアが『商品による商品の生産』で使っている用語である equations of production、production equations にもとづいて「生産方程式」を使っている。それに対応するものを de Vivo は「費用－価格方程式 cost-price equations」と呼び、Gilibert は「価格方程式 price equations」と呼んでいる。それぞれが指しているものに実質的な差異はないが、これに関しては補論を参照。

クスで、特にリカードの穀物比率論とそれに関連した極大利潤率³⁾であった。また、F. P. Ramsey と A. S. Besicovitch など数学者の助力があった。スラッファが価値の生産価格への転化について、いくらかでも考察したのは 1940 年代はじめであった⁴⁾。スラッファの研究の出発点は価格と費用の関係であって、それはむしろマーシャルに関する仕事（スラッファの 1925 年、1926 年の論文）とリンクしていると見ることができる。このような問題関心がスラッファに生まれたのは、「厳密に物質的な費用概念という重農学派の特徴 the strictly materialistic conception of cost characteristic of the Physiocrats」であって、スラッファの表現を使えば「notion of “cost as the loaf of bread”」である（de Vivo, 2003, p.4）。

スラッファ・ペーパーズからスラッファの理論的研究は 3 つの流れにグループ分けできる。それは、1. 古典派理論の解釈、特に価値と分配の理論、2. 限界主義理論の批判、3. スラッファ自身の理論の展開、である。

De Vivo は以上のような見通しを示したうえで議論を進めて行くのだが、本稿では生産方程式（de Vivo の言う費用—価格方程式）の端緒に焦点を絞るということで、1927 年から 1931 年ころまでに関する de Vivo の議論を検討の範囲とする。

De Vivo の見解のうち「方程式 equations」に関していえば（スラッファはノートでは単に equations と表現していた）、スラッファはマルクスの再生産表式からその着想を得たという一点に尽きる。そのマルクスに由来するという「方程式」は 1927-28 年段階ではどのように表わされていたのであろうか。De Vivo が取り上げて考察している方程式 equations を見ていこう。

De Vivo はまずスラッファ・ペーパーズの D3/12/5 に取められているノートから次の 2 つの「方程式」を取り出す⁵⁾。

-
- 3) スラッファは『商品による商品の生産』で、極大利潤率の概念はマルクスによっていると述べている（Sraffa, 1960, p.94）。
 - 4) Gehrke and Kurz (2006) 参照。価値の生産価格への転化に関してスラッファはほとんど関心は示さなかったようである。
 - 5) スラッファ・ペーパーズの整理記号で、D は「Notes, Lectures and Publications」を表し、D1 は Notes、D2 は Lectures、D3 は Publications を表す。D3/12 は『商品による商品

1 つ目は D3/12/5 の整理番号 2 に記されている。

$$A = a_1 + b_1 + c_1$$

$$B = a_2 + b_2 + c_2$$

$$C = a_3 + b_3 + c_3$$

$$A = \Sigma a, \quad B = \Sigma b, \quad C = \Sigma c$$

スラッフアはこの方程式に関して次のように述べている。「これらは連立一次方程式である。これらは無限の解の集合を持っているが、各集合の解は比例的である。これらの割合は一義的である。その割合を絶対価値と呼ぼう。それらは A 、 B 、……の間の純粋に数値的な関係である。それらは現実に交換が行われる比率では必ずしもない。現実の比率は法制度その他の事柄によって左右され、それらは変化し「恣意的」であり、現在のわれわれの視点からは関係のないことである」(de Vivo, 2003, p.9)。

2 つ目は D3/12/5 の整理番号 3 に記されている。

$$aA = a_1A + b_1B + c_1C \quad a = \Sigma a?$$

$$B = a_2A + b_2B + c_2C$$

$$cC = a_3A + b_3B + c_3C$$

which is the unit? $A, B, \dots? a? a_1?$

De Vivo はこれら 2 つの方程式について「困惑させられる」と言い、次のような見方を示している。1 つ目の方程式はマルクスの単純再生産表式に非常に似ている；スラッフアは 1900 年に刊行されたフランス語版『資本論』第 2 巻の単純再生産表式に「第 1 方程式 1st equations」と書き込んでいる。ところが再生産表式は方程式ではなく会計的な恒等式である。これに対し、用いられている記号に関して、 A 、 B 、 C を価格、 a 、 b 、 c を生産量、 a_i 、 b_i 、 c_i を a 、 b 、 c の生産に用いられる各商品量と見るならば、2 つ目の方程式群は 1 つ目の方程式群のより明示的な定式化と見ることができる。「結局は、このことは 2 つの方程式をマルクスの再生産表式から導かれたと見ることと矛盾しない

の生産』に関するもので枝番号が 1 から 115 まであり、115 のファイルに整理されている。D3/12/5 はその 5 番目のファイルである。各ファイルに収められているノート、文書などは 1 枚ごと整理番号が鉛筆書きされて管理されている。

のである」(de Vivo, 2003, p.10)。

スラッファがマルクスの再生産表式から着想を得たという論拠として de Vivo があげているのは、形式的な類似性のほかに、フランス語訳『資本論』第 2 巻に付したスラッファ自筆の索引項目の「1st equations」に単純再生産表式のページ番号を記していること、1942 年 7 月 30 日付のノートでスラッファが「Equations = Tableau Économique」と記している点である。

De Vivo があげている論拠には Gilibert (2003) と共通する点があるので、それらの妥当性に関してはのちに検討することにする。

次に Gilibert (2003) を取り上げよう。彼の主張点の要旨は次のとおりである。

Gilibert はまず『商品による商品の生産』では 4 つの方程式体系が導入されているという。つまり、第 1 は生存のための生産 (第 1 章)、第 2 は剰余をふくむ生産 (第 2 章前半)、第 3 は労働投入が明示された賃金後払いの方程式 (第 2 章後半)、そして第 4 は標準体系である。そのうえで Gilibert (2003) では次のようなことを明らかにするという。

- (i) 第 1 方程式 first equations の原型 origin を明らかにする。
- (ii) 第 1 方程式の草稿 draft は完全に首尾一貫したものだだった。
- (iii) 最終草稿 final draft への分析の道筋 analytical path をたどる。
- (iv) スラッファの「仮説」と「不変の価値尺度」の探究との間のリンクを解明する。

本稿では、Gilibert の主張に関しては、第 1 方程式の原型は何か、それはスラッファのノートのどこで確認することができるのか、というような点を中心に検討することにする。

Gilibert は「スラッファのインスピレーションの源は、方程式に関するかぎり、マーシャルの理論にでもリカードの理論にでもなく、マルクスの理論に求められるべきである」(Gilibert, 2003, p.28) との見解のもとに議論を開始する。しかも、そのマルクスの理論とは、価値論でも生産価格論でもなく再生産表式であるという。「再生産表式はスラッファがたどった分析の道の明らかな出発点である」(ibid.)。論拠として Gilibert は 3 点をあげる。

1. スラッフアは剰余のない価格方程式を一貫して 1st equations と呼んでいる。同じ表現を『資本論』の再生産表式の欄外 (margin) に記入している⁶⁾。
2. 1942年8月7日付の文書でスラッフアは「1st equations (simple reproduction)」と書いている (Gilibert はその文書が存在するファイルの場所を特定していないが D3/12/16 の 13(3) である)。
3. 1942年7月30日付の文書で、スラッフアはローザ・ルクセンブルクにコメントして再生産表式は経済表の現代版と考えられるとし、「Equations=Tableau Économique」と記している。

Gilibert はマルクスの単純再生産表式 (『資本論』第2巻でマルクスが示した数値例そのもの) を示し、それについて考察した上で、「剰余価値のない単純再生産」として、de Vivo と同じスラッフアの2つの方程式を取り上げている。

III 生産方程式の端緒—— de Vivo と Gilibert の議論の検討

De Vivo と Gilibert は同様の問題を別々に議論しているが、いくつか共通点がある。本稿のテーマに関していえば、また最大の共通点だと思われるが、スラッフアの理論の出発点にマルクスの再生産表式を据えていることである⁷⁾。また、それを主張する際に、スラッフアがいくつも記している類似の方程式のなかから両者とも同じ方程式選んでいることである。スラッフアはノートの多くの箇所と同様の方程式を記しており、また執筆順が特定できないにもかかわらず、両者がともに同じ方程式を取り上げていることは興味深い点である⁸⁾。

6) Gilibert の margin という表現は不適切である。De Vivo (2003, p.9) では「on verso of p.591」、すなわち「591 ページの裏面」とされている。この点に関しては後述。

7) 『商品による商品の生産』の冒頭の諸命題がマルクスの再生産表式から導かれたとする見解はすでに Eatwell and Panico (1987) にある。

8) スラッフアのノートには日付が記されていたりページ番号が付されていたりすることがあるが、自身のノートをフォルダーにまとめる場合、それらを執筆順に整理しているとは限らない。スラッフア・ペーパーズでは、フォルダー内のノートの整理順はスラッフア自身による整理順に手を加えていないことになっているが、そのとおりであれば、むしろ執筆時期の新しいものが手前に置かれていて、執筆日が特定できる場合で確認した限り、整理番号に読んでいくと日付をさかのぼる場合が少なくないという印象である。

この節では、de Vivo と Gilibert の議論を手掛かりに、スラッフアの方程式がどのような過程で進展してきたのか、それがマルクスの再生産表式とどれだけの係わりがあるのかを検討することにする。

De Vivo と Gilibert はスラッフアの出発点の方程式として同じ方程式を提示しているが、多くの中からなぜそれらを選んだのかは説明していない。2 人が選んだ方程式はスラッフア・ペーパーズのファイル D3/12/5 に収められているノートに記載されているもので、それらのノートは 1927-28 年の冬に書かれたものとされている。スラッフアはちょっとしたメモ書きや数値例の計算なども残っていて、断片と言ってよいほどの書き付けまでがスラッフア・ペーパーズには収められているのである。

De Vivo と Gilibert はともに剰余がない方程式に関して 3 産業（ないし 3 部門）の例を、しかも文字式による表記を取り上げた（Gilibert は剰余をとまなう方程式では 2 産業の数値例をまずあげている：Gilibert, 2003, p.34）。『商品による商品の生産』では、スラッフアはまず小麦と鉄の 2 生産物の場合をあげて説明を始めている。マルクスの再生産表式は 2 部門分割が基本である。剰余がない方程式で 2 産業の例をスラッフアは残していないのかというと、そうではない。非常に簡単な数値例が D3/12/6 の整理番号 6 に記されている（同じ数字例は D3/12/10 の 95 にもある）。同じページに剰余のない 3 産業の数値例も記されている。D3/12/5 と D3/12/6 のいずれも執筆時期は 1927-28 年冬（Winter 1927-28）とされている（2 つのファイルの「Winter 1927-28」という日付はスラッフア自身による）。De Vivo と Gilibert はファイル番号の若い方を採用したのであろうか。

この場合、同じ期間に執筆されたとする 2 つのファイルに収められた文書の各ファイル内の文書の順は執筆順であるとの保証は全くない。スラッフアはノートに執筆の日付を記入していることがあるが、同じフォルダーにスラッフア自身が整理した場合でも（スラッフアはそういう趣旨の記載をフォルダーに記していることがある）、日付順にノートが並んでいるわけではない⁹⁾。

9) そういう意味では、スラッフアのノート類を編集して出版する場合、テキストの確定と執筆時

先に de Vivo 論文から 2 つの方程式群 (D3/12/5 の整理番号 2 と 3) を引用したが、そして Gilibert もまったく同じ方程式群を引用しているのだが、2 つ目の方程式群を Gilibert は次のように記している。

$$aA = a_1A + b_1B + c_1C$$

$$bB = a_2A + b_2B + c_2C$$

$$cC = a_3A + b_3B + c_3C$$

両者を比較すると、de Vivo は第 2 式の左辺を bB ではなく B と記している。これは単にどちらかが間違っているとは直ちには言えない。というのは、de Vivo は bB の b を記していないのだが、スラッフアのノートを見ると、 b が消されているようにも見えるからである。

さて、マルクスの再生産表式との関連について見ていこう。

De Vivo は D3/12/5 の整理番号 2 の方程式をマルクスの再生産表式に非常に似通っているという。再生産表式がスラッフアの出发点にあるとする Gilibert の根拠は、剰余のない方程式をスラッフアは一貫して第 1 方程式と呼んでいる、スラッフアは第 1 方程式を単純再生産と呼んだ、スラッフアは再生産表式を経済表の現代版だと考えた、ということであった。

スラッフアはウィリアム・ペティや重農学派の費用の捉え方に注目し、そしてそれを媒介したのがマルクスの『剰余価値学説史』であり、かつ価値論講義の準備過程でスラッフアが『剰余価値学説史』を読んだことにあるとしても、スラッフアの方程式の起源が『資本論』第 2 巻の再生産表式にあると直ちに結論づけるのは早計であろう。それにマルクスの再生産表式は価格決定を論じるための装置ではないし、de Vivo や Gilibert が論拠の一つとしている「1st equations (simple reproduction)」と記されたノートは 1942 年 8 月 7 日付のノートである。Gilibert も指摘しているように、この時期にスラッフアはロー

期の確定はかなり困難な作業となろう。価値論講義のように比較的まとまっている文書でも、1928-29 年の Michaelmas 学期と Lent 学期の初回のシリーズのテキストの確定と、年度を追うごとの追記や修正をどのようにテキストに反映させるのか、講義ノートを一見しただけでは判然としないのである。価値論講義は、1 回 60 分を週 2 回、各学期 8 週で 1 学年度に 2 学期にわたって行われた。スラッフアの価値論講義が行われたのは 3 学年度だけであった。

ザ・ルクセンブルクの『資本蓄積論』を読んだ形跡があり、そのことが文章表現上に反映されたことが考えられる。いずれにしても、1927-28 年ころの文書なりノートから再生産表式との結びつきは示されてはいない。Gilibert が示した文書は、1940 年代になって、スラッフアが自身の生産方程式とマルクスの再生産表式の類似性を認識したことの論拠ともなりえるのである。

Gilibert は、1928 年 5 月～7 月に記されたという D3/12/9 の整理番号 11 のノートを、スラッフアの方程式の源にマルクスの再生産表式が存在するという論拠として挙げていた (Gilibert 2003, p.29)。しかし、このノートをよく読むと、スラッフアが言及しているのは『資本論』第 2 巻であっても第 1 篇第 I—III 章であって、再生産表式が記されている第 3 篇ではない。

De Vivo も指摘しているが、Gilibert も、『資本論』フランス語訳第 2 巻へのスラッフアの書き込み、すなわちスラッフアが自筆の索引 (スラッフアは読んだ本の末尾の白紙ページや裏表紙の遊び紙 flyleaf や見返しなどに索引を記していることがある) に「1st equation」と記し、それが「444」ページに対応すると記していることを論拠としてあげている。444 ページは単純再生産表式が記されているページであり、444 ページにはスラッフアがそのページを読んでいたことを示す書き込みもある。

このように物証を示されると、なるほどと思ってしまうかもしれないが、よく考えると、それはスラッフアがマルクスの単純再生産表式から方程式を着想した証拠には不十分である。なぜなら、逆に、スラッフアが自身の方程式を確立してからマルクスの再生産表式を知って、両者の類似性に気付いたとも言えるからである。筆者はむしろそのように考える。De Vivo と Gilibert の見解への疑問を整理すると次のようになる。

第 1 に、スラッフアが価値論講義 (ケインブリジ大学経済学部で 1927 年 10 月から行うことになっていたが実際には 1 年間延期された) の準備を始めた 1927 年の夏ころから、生産方程式の議論が実質的に出来上がっていたという 1928 年末までのあいだのノートに『資本論』第 2 巻の再生産表式への参照を示すノートは残っていない。少なくとも de Vivo も Gilibert もそのようなノートの存在は指摘していない。Gilibert があげている D3/12/9 のノートで

スラッフアが言及しているのは『資本論』第2巻の第1篇であり、第3篇ではない。スラッフアが直接言及したのは第1篇であっても、第3篇も読んだと考えるのが自然ではないかと反論されるかもしれない。だが読んだとしてもいつ読んだのかが重要な点である。1927年から1930年までのスラッフアのノートの中で『資本論』第2巻への言及は第一篇に限られている。少なくとも第三篇の再生産表式への言及の存在を de Vivo も Gilibert も示していないし、筆者が閲読したかぎりでは見つかっていない。

筆者があげる第2の疑問点は、まさにスラッフアが再生産表式をいつ読んだのかに関係する。De Vivo も Gilibert もスラッフアの自筆索引で、再生産表式を第1方程式 1st equations と記したことをあげている。この点は筆者も確認した。しかし、この索引はいつ記入されたのであろうか。スラッフアによる索引を見ると一見して気づくことであるが、1st equations と記載されている位置は、『資本論』第2巻第1篇に関する事項が並んでいるそのすぐあとである。スラッフアが『資本論』第2巻を最初から通読して索引を記していたとするなら、いくつかは前後して記載することはあっても、第1篇に関する事項のあとに、単純再生産表式のページである 444 が来ることは不自然ではないだろうか。444 のあとは第3篇の事項ではあるが少しページがもどり、そして第2編の事項の索引があり、そして第3篇の事項へと至っている。いくつか前後する箇所はあるが、大筋はそうである。その意味で 444 を参照ページとする 1st equations の索引内での記載位置は不自然なのである。

索引に関してもう一点指摘できることは、1st equations という索引事項が記入された時点では、当然のことながら 1st equations は出来上がっていたということである。もし『資本論』第2巻を通読していた時点で 444 ページの単純再生産表式にスラッフアが着目したとしても、その時点で 1st equations と記すことはない。つまりまだ存在しないものを記すことはないと考えてよい¹⁰⁾。

10) マルクスの再生産表式とスラッフアの方程式 equations との関係でもい一点指摘しなければならないことがある。それはマルクスの単純再生産表式には剰余が存在するという点である。生産規模の変化が考えられていない『商品による商品の生産』では「生存のための生産」のみならず「剰余をふくむ生産」の場合も単純再生産ということになる。「生産量の変化がない場合」に議論を限定するというようなことを、スラッフアは 1940 年代のはじめまでに明確に考えていたわけではない。

第 3 に指摘したいことは、Gilibert があげている 1942 年の 2 つの記述をどう解釈するのか、すなわち 1942 年 7 月 30 日付の文書でスラッフアがローザ・ルクセンブルクに言及し、「Equations=Tableau Économique」と記し、1942 年 8 月 7 日付の文書で「1st equations (simple reproduction)」と記していることをどう解釈するのかである。

これらの記述は、次のように解釈することも可能である。つまり、スラッフアは 1942 年ころにローザ・ルクセンブルクの『資本蓄積論』を読んで再生産表式を知った。そして『資本論』第 2 巻の再生産表式のページを開いた。そしてマルクスの単純再生産表式と自身の「方程式」の類似性に気づき、索引項目に「1st equations」と記し単純再生産表式のある 444 ページを記した。このような順序は十分に考えるのではないか。

スラッフアが自身の「方程式」とマルクスの再生産表式との類似性を認識したのは 1942 年と考えるのは自然ではないだろうか。「方程式」と再生産表式を関連づけるスラッフアの記述で存在が判明しているのは 3 箇所であり、そのうち日付が明確なのは 2 箇所である。しかもその 2 箇所は同時期に記述されたものである。残るひとつは、日付が不明であり、また 1927～28 年ころのスラッフアのノートには『資本論』第 2 巻第 1 篇への言及はあるが第 3 篇への言及は発見されていない。スラッフアが当初から「方程式」と再生産表式の関連を認識していたならば、1942 年のノートになって、というか 1942 年のノートにのみ両者の関連に言及する記述が残っていることを、どう説明できるのだろうか。

『商品による商品の生産』への道筋をたどるとしても、1927～28 年にスラッフアがノートに書き記した方程式は何を目的にしたものだったのかを明確にする必要がある。

1927 年 11 月 28 日付で J.M. ケインズが妻リディアにあてた手紙が Gilibert (2006) に引用されている。ケインズは「土曜日に私はスラッフアと彼の仕事について長く話し込んだ。彼の仕事は非常に興味深くて独創的だ。だが彼のクラスの学生たちが彼の講義を理解できるだろうかと思う。」と記している（土曜日とは手紙の日付の 2 日前の 1927 年 11 月 26 日と考えられる）。スラッフアの

手帳の1927年11月26日(土)の欄に「Kが第1方程式を認める K. approves 1st equations」と記されていると de Vivo (2003, p.5) は報告している。これらは非常に重要な資料である。

ここから読み取れることは、第1方程式は、価値論講義の準備過程で生まれたものであり、講義の中で学生に提示されるはずのものであったと考えられるのである。ただし、価値論講義ノート(スラッフア・ペーパーズのD2/4)に「方程式」が存在するという指摘はいまのところないし、筆者も見つけることはできなかった。スラッフアが1928年にケインズに草稿を見せたということについて、これらの記録から、この日付は1928年ではなく1927年11月26日のことであった可能性があり、さらに詳しく検討する必要はある。

IV 今後の課題——むすびにかえて

以上の議論をふまえて、最後にいくつかのことを指摘しておきたい。

1. テキストの編集：スラッフア・ペーパーズを利用した研究論文はすでにいくつも公刊されている。しかし、スラッフア・ペーパーズの内容はいまのところトリニティ・コレッジのWren Libraryで閲読し、筆写ないしパソコンでの入力による記録でしか利用できない(スラッフア・ペーパーズの出版のための編集にかかわっているチームの構成員はマイクロフィルム版の利用など、その特権を活かせるのかもしれない)。その制約のため、判読の誤り、筆写の誤りを避けることは困難である。実際、de VivoとGilibertで判読の異なる箇所があった。その意味ではテキストの早期の出版を願うものである。ただ、スラッフア・ペーパーズを実際に閲読した経験からいえば、断片的な記述をどこまで出版するのか、書き換え、挿入が多い文書のテキストの確定と異稿の扱いをどうするのか、執筆順をどのようにして確定させるのか、編集上の課題は多いと思われる。

2. 価値論講義と『商品による商品の生産』との関係：『商品による商品の生産』の生産方程式に発展する、1927～31年の方程式 equations は、価値論講義の準備過程で考案されたことは間違いない。しかし、実際に用いられたであろうと考えられる価値論講義ノートには「方程式」は見当たらない。ではなぜ

方程式は講義されなかったのか。「1920 年代の終わりには中心的命題は形を整えていた」と『商品による商品の生産』の序文では述べられていた。この中心的命題 central propositions が記述された 1920 年代終わりのノートはスラッファ・ペーパーズに存在するのか。存在するとしてそれがどれなのか特定が可能なのか。より具体的に言えばスラッファがケインズに示した draft はどれなのか。スラッファ・ペーパーズを閲読すると、書き損じと思われる断片まで残されている。中心的命題が記された 1920 年代終わりのノートが確定できるかどうか興味深い点である。

3. 「方程式」の形成過程：これに関していえば、de Vivo や Gilibert が考察しているのはもっぱら単一生産物産業の場合である。その過程で労働投入の扱い、つまりは賃金の扱い（生活資料として原材料と同じく前払いとするのか、純生産物の分け前として後払いで扱うのか）は問題にされていなかった。最終的には賃金後払いで生産方程式は構成されているが、それが単なる技術的な問題（数学的処理の簡単さ）から来たのか、十分な経済的意味があるのかは必ずしも明らかにされてはいない。方程式は、結合生産がある場合、固定資本がある場合、土地を考慮した農民生産の場合と、それぞれの方程式がある。1942 年のノートで農業を考慮した方程式で、賃金前払いでの記述があった。どの段階で賃金後払いの方程式になったのか、その理由は何だったのか、それらの説明は今後の課題である。

4. マルクスとの関連：『商品による商品の生産』には付録の文献引証で極大利潤率に関してマルクスへの言及はあるが、『資本論』で使われているマルクス特有の用語や分析用具は使われていない。だが、「方程式」に関して言えば、再生産表式がもとになっているという見解があり、少なくとも『剰余価値学説史』や『資本論』への言及が 1927-28 年のノートにはある。ところが 1940 年代のノートでは、『商品による商品の生産』に関連する議論のなかで可変資本、不変資本、有機的構成といった用語がしばしば使われている。しかし、『商品による商品の生産』ではそのような痕跡は消し去られている。それは何故だったのか。

5. その他の記述：スラッファ・ペーパーズを閲読すると、『商品による商品

の生産』には反映されなかった興味深い記述が散見される。言い換えれば『商品による商品の生産』は、可能な限り不要なものをそぎ落とした、骨格だけが表示された作品だといえる。そぎ落とされた部分はスラッフア・ペーパーズの中のノートに含まれている。そのような文書は筆者が閲読した中にもあったし、そういう指摘もされている（例えば Kurz and Salvadori (2005)）。その意義を判断するのはスラッフア・ペーパーズの閲読者であり研究者である。そのためには、それらの文書、ノートの自由な利用と公刊が望まれる。

補論

筆者が「生産方程式」という用語を使ったのは、スラッフアがノートの中で単に「方程式 equations」と呼んでいたものが、『商品による商品の生産』では「生産方程式」と呼ばれているからである。生産方程式 equations of production という用語をスラッフアは『商品による商品の生産』のどこで使っているかというところ、当該の議論の範囲では第 11 節の表題として使っているし、第 40 節の表題でも「ゼロ賃金の生産方程式 Production equations with zero wages」のように使われている。あるいは production-equations という表現もある。それを de Vivo は「費用－価格方程式 cost-price equations」と呼び、Gilibert は「価格方程式 price equations」を彼の論文の題名にも使っている。松本は「生産方程式」という用語を使っている。スラッフアは、少なくとも 1927 年から 1931 年のノートのなかでは「方程式 equations」（第 1、第 2 と付くことはあっても）としか言っていないと思われるし、筆者＝松本は生産方程式という表現を見つけてはいないし、de Vivo も Gilibert もそれぞれの用語のスラッフアの使用例は示してはいない。

筆者は、de Vivo の費用－価格方程式、Gilibert の価格方程式という用語をスラッフアが使ったかどうかを考えていた過程で、『商品による商品の生産』ではどうであったか、つまり、1927 年の「方程式」に対応するものが『商品による商品の生産』では何と呼ばれているのか、また関連する用語をどのように使ったのか見直してみた。方程式 equation に関しては、スラッフアは一般的な意味で使っているだけである。ただ、『商品による商品の生産』の第 1

章「生存のための生産」と第 2 章「剰余をふくむ生産」の間で用語法の違いがあるのが気になった。第 1 章は生存のための生産であるが、市場 market での取引が最初から考えられている。しかし、2つの産業間の取引に関して「価格 price」ではなく「交換価値 exchange-value(s)」が使われ、あるいは「商品の単位価値 the value of units of commodities」という表現が使われている。1920 年代に「方程式 equations」と呼ばれたものは「生産と生産的消費の方法 the methods of production and productive consumption」ないし「生産の方法 the methods of production」と呼ばれる。ところが、第 1 章の最後のパラグラフになると、突然「価格 price」が断りなく（呼び方を変えるというように断りなく）出てきて、方程式 equation(s) という表現も出てくる。そして第 2 章にはいると、もっぱら価格 price が使われることになる。

『商品による商品の生産』第 1 刷で式の誤りがあり、第 2 刷 (reprint, 1963) で訂正された。その理由としてスラッフアは、印刷段階の最後に記号法を変えたことによると述べている。また、本書は「大量の古いノートから寄せ集められた being put together out of a mass of old notes」と序文で述べられている。このようなことから、用語法で違和感がなければ、利用された古いノートでの用語が残ったことは十分に考えられるのである。

参考文献

- De Vivo, Giancarlo (2003), Sraffa's Path to *Production of Commodities by Means of Commodities*. An Interpretation, *Contributions to Political Economy*, 22: 1-25.
- Eatwell, J. and C. Panico (1987), Sraffa, Piero (1898-1983), *The New Palgrave, A Dictionary of Economics*, Vol.4.
- Gehrke, Christian and Heinz D. Kurz (2006), Sraffa on von Bortkiewicz: Reconstructing the Classical Theory of Value and Distribution, *History of Political Economy*, 38(1): 91-149.
- Gilibert, Giorgio (2003). The Equations Unveiled: Sraffa's Price Equations in the Making, *Contributions to Political Economy*, 22: 27-40.

- Gilibert, Giorgio (2006), The Man from the Moon: Sraffa's Upside-down Approach to the Theory of Value, *Contributions to Political Economy*, 25: 35-48.
- Kurz, Heinz D. (1998), Against the current; Sraffa's unpublished manuscripts and the history of economic thought, *The European Journal of the History of Economic Thought*, 5(3), Autumn: 437-451.
- Kurz, Heinz D and Neri Salvadori (2005), Representing the Production and Circulation of Commodities in Material Terms: On Sraffa's Oblectism, *Review of Political Economy*, 17(3): 423-441.
- Salvadori, Neri (2005), Introduction, *Review of Political Economy*, 17(3):345-348.
- Smith, Jonathan (1998), An Archivist's Apology: The Papers of Piero Sraffa at Trinity College, Cambridge, *Il pensiero economico italiano*, VI(1): 39-54.
- Sraffa, Piero (1960), *Production of Commodities by Means of Commodities : Prelude to a Critique of Economic Theory*, Cambridge University Press (菱山泉・山下博訳『承認による商品の生産—経済理論批判序説』有斐閣、1962年)。
- 千賀重義 (2002) 「スラッフア価値論講義とリカードウ解釈」『横浜市立大学論叢』第 53 巻第 1 号。
- 松本有一 (1989) 「『商品による商品の生産』の形成過程に関する予備的考察」『経済学論究』第 42 巻第 4 号。